

BAUDELAIRE の 〈spleen〉 の形象——時間篇

南 直 樹*

はじめに

J'ai plus de souvenirs que si j'avait mille ans¹⁾.

「私は、千年生きたよりもっと多い思い出を持つ」。《Les Fleurs de Mal》(第二版)のLXXVISpleenのこの冒頭の一句は、BAUDELAIREの他の詩においてもしばしば見出される「もっとも印象的な歌いだしの一つ」²⁾(『悪の花注釈』)として知られているが、BAUDELAIREの時間意識の在りようを端的に表すものである。René GALANDはこの詩句について、「時間の重みに打ちひしがれている」BAUDELAIREが「恐れているのはもはや死すべき生成変転ではなく、彼の三十数年の人生を千年に変えてしまう時間の不動化あるいは引き延ばしである」³⁾と註釈している。詩人は同じ詩の後半で、この時間の不動化・引き延ばしをこう嘆く。

15 Rien n'égale en longueur les boiteuses journées,
Quand sous les lourds flocons des neigeuses années
L'ennui, fruit de la morne incuriosité,

* 福岡大学人文学部教授

Prend les proportions de l'immortalité⁴⁾.

「^{びっこ}跛ひきひき過ぎてゆく日々ほど長いものが、またとあろうか。雪深い年の、重い粉雪の降りつむ下で何にも興味のなくなった陰鬱な心の果実、倦怠が不滅のものの規模をもって広がる時」(v.15-18)。「^{アンニエイ}倦怠」は、「*Les Fleurs du Mal*」の序詩 *Au Lecteur* の中で明らかにされていたように、「あらゆる悪徳」の中でも、「さらに醜く、さらに^{よこしま}邪な、さらに不浄な者」であり、「大仰な身振りもせず大きな声も立てないが、進んで地球を廃墟にしてしまうことも、ひとあくびでこの世を呑みこむことも、やりかねない」^{デリケート}「繊細な怪物」である。阿部良雄は BAUDELAIRE におけるこの spleen と ennui の関連について、「「倦怠」と訳した ennui は、人生に興味がもてなくなって、何もせず退屈している、永続的な状態を指すのに対して、スプリーンは、もう少しははっきりと病気に近い一時的な状態、むしろ生理的なふさぎこみ、嫌悪感、無気力を意味する」⁵⁾と述べている。この病的精神状態の中で、BAUDELAIRE にあっては生きるこの意味は失われ、時間の観念はその本質を喪失して墮落する。

—Elle pleure, insensé, parce qu'elle a vécu!
Et parce qu'elle vit! Mais ce qu'elle déplore
Surtout, ce qui la fait frémir jusqu'aux genoux,
35 C'est que demain, hélas! il faudra vivre encore!
Demain, après-demain et toujours!—comme nous⁶⁾!

(*Le Masque*)

「—彼女は泣くのだ、愚か者よ、生きているが故にこそ！そしていま生きるがゆえに！だが何にもまして嘆くのは、彼女を膝までも^{おのの}慄かせるのは、明日も、ああ！まだ生きねばならぬこと！明日も、^{あさって}明後日も、いつまでも！—われら

と同じく！」(v.32-36)。まさに「私たちの^{こころ}心情がひとたび^{とりいれ}収穫をすませてしまえば、生きることは一つの不幸、それは誰も知る秘密」(*Semper Eaden*)なのである。

I

かくして BAUDELAIRE にあっては、「時間を殺す *tuer le temps*」(=「暇をつぶす」)ことは人生の最大の課題の一つとしてあった。散文詩 *Le Garant tireur* に次のような^{ディスタール}言説を読むことができる。

Comme la voiture traversait le bois, il la fit arrêter dans le voignage d'un tir, disant qu'il lui serait agréable de tirer quelques balles pour *tuer* le Temps. Tuer ce monstre-là, n'est-ce pas l'occupation la plus ordinaire et la plus légitime de chacun⁷⁾?

「馬車が森を走り過ぎつつあった時、彼はとある射的場の近くに車を止めさせて、〈時間〉を殺すために二、三発撃ってみるのも愉快だろうと言った。この怪物を殺すことこそ、人おのおのの、最も普通で最も正当な仕事ではないだろうか?」。BAUDELAIRE は、この「打っても叩いても死なない〈時間〉を殺すために、そしてかくもゆるやかに流れる〈生〉を加速するために」⁸⁾(散文詩 *Portraits de Maîtresses*) 残された唯一の方法は、「酔っている」ことであると主張する。それを BAUDELAIRE は *Enivrez-vous* という散文詩の中でこう描き出している。

Il faut être toujours ivre. Tout est là : c'est l'unique question. Pour ne pas sentir l'horrible fardeau du Temps qui brise vos épaules et vous

penche vers la terre, il faut vous enivrer sans trêve.

Mais de quoi? De vin, de poésie ou de vertu, à votre guise. Mais enivrez-vous.

Et si quelquefois, sur les marches d'un palais, sur l'herbe verte d'un fossé, dans la solitude morne de votre chambre, vous vous réveillez, l'ivresse déjà diminuée ou disparue, demandez au vent, à la vague, à l'étoile, à l'oiseau, à l'horloge, à tout ce qui fuit, à tout ce qui gémit, à tout ce qui roule, à tout ce qui chante, à tout ce qui parle, demandez quelle heure il est; et le vent, la vague, l'étoile, l'oiseau, l'horloge, vous répondront : « Il est l'heure de s'enivrer! Pour n'être pas les esclaves martyrisés du Temps, enivrez-vous; enivrez-vous sans cesse! De vin, de poésie ou du vertu, à votre guise. »⁹⁾

「いつも酔っていないなければならない。すべてはそこにあり、それこそ唯一の問題だ。あなたの両肩をくだき、あなたを地面へと押し^お屈^{かが}める〈時間〉^{いと}の厭^{いと}わしい重荷を感じないために、休みなく酔っていないなければならない。だが何に? 葡萄酒^{さけ}に、詩に、あるいは美徳に、あなたの好むがままに。だが酔いたまえ。そして、もしとある宮殿^{みやだん}の階^{はし}の上で、とある濠^{ほり}の緑の草の上で、あなたの部屋の陰気な孤独のなかで、陶酔はすでに衰えもしくは消え失せて、あなたが目覚めるならば、問いたまえ、風に、波に、星に、鳥に、大時計に、逃げてゆくすべてのものに、嘆息するすべてのものに、流転するすべてのものに、歌うすべてのものに、口をきくすべてのものに、問いたまえ、いま何時であるかと。すると風は、波は、星は、鳥は、大時計は、あなたに答えるだろう、「酔うべき時刻^{とき}だ! 〈時間〉^{しいた}に虐げられる奴隷とならぬために、酔いたまえ。絶えず酔いたまえ! 葡萄酒に、詩に、あるいは美徳に、あなたの好むままに」と」。この散文詩について、Cl. PICHOS は「この小さな詩は BAUDELAIRE のモラルの本

質的な主題^{テーマ}のひとつを扱っている、すなわち酔っていることは——その原因が何であれ、雲であれ、阿片チンキであれ、ワーグナーの音楽であれ——情容赦のない時間を免れる唯一の方法である」¹⁰⁾と記している。詩人は、陶酔の中に生き、時間を忘却することを説いている。これは誰もが望む理想の生であろう。だが有限で相対的な存在でしかない BAUDELAIRE（そして僅かな真^{ミスティック}の神秘家を除いた我らほとんど凡ての人間）は、無限に絶対的に酔っていることは不可能である。我々にも稀に起こるかもしれない陶酔も一瞬^{はかな}続いては儚く消え去り、生命^{いのち}を殺戮^{きつりく}する「時間」の支配する、辛く厳しい現実が舞い戻ってくる。

そうした生の両面性の極端を、そしてとりわけ時間の苛烈な残酷さを衝撃的に描き出しているのが、散文詩 *La Chambre double* である。詩人は最初「一つの夢想にも似た部屋、そこに淀^{よど}む空気が、淡く薔薇色と青に染まっている、本当に精神的な部屋」に居る。阿部良雄はこの部屋の特質について、「*spirituelle*」と「イタリック体にしたのはおそらく、この形容詞が日常よく用いられる場合の「才智のある」の意ではなくて、「精神的な」という意で「物質的な」の反意語として用いられていることを強調したのもあろう。リトレがこの形容詞の第一の解として「精神^{エスプリ}〔^{エスプリ}霊〕であり、身体をもたぬ」と定義し、「天使たちは精神的な実質である」という例を挙げているのに当てはまるかも知れない。そうすれば「部屋」の形容に用いるのは一個の矛盾あることの意義もまた、イタリックにすることの理由たり得よう。言うならば、芳香の所在によって気化^いし、阿片の作用によって視像^{ヴィジョン}その他が超自然化して、限りなく霊的狀態へと接近した部屋である。」¹¹⁾と註釈している。「魂はそこで、哀惜と欲望の香に薫じられた、怠惰^{ゆあみ}の沐浴をする。——それは何かしら、黄昏^{たそがれ}めいた、青みをおび薔薇色をおびたものだ。日蝕の間の、逸楽の夢」である。「家具たちは、長々と伸びて、虚脱状態におちいり、物憂げな姿をしている。家具たちは夢見る風情である。「織物たちは、花々のように、空のように、落日のように、声のない言葉を語っている。「壁の上に厭^{いや}らしい美術品など一つもな

い。純粋な夢や、分析を経ない印象に比べれば、輪郭^{さだ}定かな芸術、明証的な芸術は、一個の冒瀆である。ここではすべてが、調和^{ハーモニー}に特有の、十分な明快さと甘美な晦渋さを兼ね備えている。「この上もなく繊細に選び出された、ごく微量の芳香が、ほんの僅かな湿り気をおびてこの雰囲気の中に漂い、そこにまどろむ精神は、温室^{サンサンオン}さながらの感覚にやさしく揺られる」。「薄紗^{モスリン}が窓の前にも寝台の前にも惜しみなく雨と注ぐ。雪の瀑布^{そそ}となって溢れ^{あふ}落ちる。この寝台の上には〈偶像〉が、夢たちの女王が横たわっている」。そして詩人は「いかなる恵み深い守護^{ダイモーン}霊のおかげで、私はこうして、神秘や、沈黙や、平安や、芳香に取り囲まれているのだろうか？ おお！ 浄福よ！ われわれが一般に生と名づけるものは、その最も恵まれた拡張状態においてさえ、今私の識りつつある、そして一分一分、一秒一秒、味わいつつある、この至高なる生と、何一つ共通なものを持ってやしない！」と陶酔の只中にあることの歓びを高らかに表明する。かくして詩人はそうした夢想の中で、遂には全面的に「時間を殺す」ことに成功したと宣言する。

Non! Il n'est pas de minutes, il n'est plus de secondes! Le temps a disparu; c'est l'Éternité qui règne, une éternité de délices¹²⁾!

「いな！ もはや分などはない！ もはや秒などもない！ 時間は消え失せてしまった。君臨するのは〈永遠〉、快樂^{けらく}に満ちた永遠だ!」。こうして詩人は、時間の観念が完全に消失する至福の陶酔状態を手に入れたかのように見える。

しかしその時、「物凄い、重々しい一撃がドアに鳴り響き」、詩人の至福の夢想を胡散霧消させてしまう。「それから、ひとりの〈妖怪〉が入ってきた」。それは法の名において彼を責め立てにやってくる「執達吏」、貧乏の苦情を言い立てに来て、彼の生活の苦しみに、彼女の生活のくだらぬ面倒を付け足そうとする「破廉恥な情婦」、「あるいは原稿の続きを催促するどこかの新聞編集長の

使い走りの少年」である。「天国めいた部屋も、偶像、夢たちの女王、偉大なルネの呼びならわした〈^{シルフィード}空気の精〉も、こうした魔法の一切は、〈妖怪〉の加えた乱暴な一撃の下に、消え失せてしまった」。そして詩人は現実を再び見出す。「おぞましきよ！私は思い出す！思い出す！そうとも！この陋屋、永久なる倦怠のこの棲処こそ、まさに私の棲み処なのだ。ここに、愚かしい、埃っぽい、角の磨り減った家具がある。炎もなく燠もなく、痰唾に汚れた暖炉。埃の中に雨が条をつけた、惨めな窓。消してあったりあるいは不完全だったりする原稿、不吉な日々鉛筆で印のつけてある曆！」。詩人が「とぎすまされた感受性でもってそれを陶醉していた、別世界のあの香りは、やんぬるかな！なにやら嘔吐をもよさせる^{かび}黴臭さに混じった、^{たばこ}煙草のむかつく悪臭に取って代わられてしまった。今ここに人の嗅ぐものは、^{あんたん}暗澹たる孤独の^す饅えた匂いだ」。「狭くて、しかもこれほど不快感に満ちたこの世の中で、顔見知りのある品物がただ一つ、私に^{ほほえ}微笑みかける——阿片チンキの壘だ。昔馴染みの怖ろしい情婦。およそ情婦の例にもれず、やんぬるかな！愛撫もたっぷりなら裏切りもたっぷりふるまってくれる」。BAUDELAIRE は « Un Mangeur d'Opium » の中で「阿片の責苦」についてこう書いている。「同様に阿片吸引者は、その夢想の対象となるものごとくを、不可避な現実へと変化させるのだった。こうした^{ファンタスマゴリー}魔術的の幻燈のすべてが一見いかに美しくいかに詩的であろうとも、それは深い苦悶と暗黒な憂愁とを伴っていた。彼は夜な夜な、光のない深淵のなかへと際限もなく、およそ知られる限りの深さを超えて、再び登ってこられる期待もなしに、降りてゆくような気がした。そして目覚めの後さえも、虚脱に近い悲しみ、意気阻喪の状態が続くのだった」¹³⁾。そして遂には消えたはずの時間が姿を現す。

Oh! oui! Le Temps a reparu; le Temps règne en souverain maintenant;
et avec le hideux vieillard est revenu tout en démoniaque cortège de

Souvenirs, de Regrets, de Spasmes, de Peurs, d'Angoisses, de Cauchemars, de Colères et de Névroses.

Je vous assure que les secondes maintenant sont fortement et solennellement accentuées, et chacune, en jaillissant de la pendule, dit :
— « Je suis la Vie, l'insupportable, l'implacable Vie! »

Il n'y a qu'une Seconde dans la vie humaine qui ait mission d'annoncer une bonne nouvelle, la *bonne nouvelle* qui cause à chacun une inexplicable peur.

Oui! Le Temps règne; il a repris sa brutale dictature. Et il me pousse, comme si j'étais un bœuf, avec son double aiguillon. — « Eh hue donc! bourrique! Sue donc, esclave! Vis donc, damné! »¹⁴⁾

「ああ！そうだ！〈時間〉がふたたび姿を現した。今や〈時間〉が王者として君臨する。そして、この醜い老人とともに、彼に従う魔性の伴^{とも}回り、〈思い出〉、〈後悔〉、〈痙攣〉、〈苦悶〉、〈悪夢〉、〈怒り〉、そして〈神経症〉が、ことごとく戻ってきた。」「いや、本当の話なのだ、今や秒は強く厳^{おごそ}かに刻まれ、その一つ一つが、柱時計から飛び出して来ては告げる、——「私こそが〈生〉なのだ、耐え難く、情容赦のない〈生〉なのだ！」と。「人間の生にあって、ただ一つの〈秒〉だけが、よい知らせを、福音を告げる使命をおびているのだが、その知らせは、おのおのの人間に、説明のつかぬ恐怖を煮き起こす」。この「よい知らせ、福音」とは死の知らせのことである。確かに、人は一旦死ねば時間に追い立てられることはもうなくなる。しかし死はやはり、人間に「説明のつかぬ恐怖」抱かせる。「そうだ！〈時間〉が君臨する。彼はその横暴な独裁を再び始めた。そして、二本の釘を打った突棒で、私^{わたし}がまるで牛^{うし}でもあるかのよう駆り立てる。——「それ、はいし、どうどう！駄^だ駄^だめ！さあ汗をかけ、奴隷め！生きるがよい、罰当たりめ！」。BAUDELAIREの人生における時間への恐

怖はここに極まっている。

人間は誰しも皆、眼をそむけて逃避することの許されない生くべき現実を持つ。人間は畢竟「〈時間〉に虐げられる奴隷」である。人間はある時間の持続の中で生まれ、生きそして死ぬ。死の運命の必然性は誰も逃れられない。確かに、人は死の直接的経験を持つことはできないのだから、生きている限り死とは無縁であると言うこともできる。しかし人は他者の死を、特に二人称（近親者）のそれを経験することによって、来るべき一人称（自己）の死についての情意的表象を自らに形成する。人間は所詮「いずれは死ぬ身の浪費屋、怠け者」（散文詩 *L'Horloge*）である。それゆえ時間こそはすべての人間が避けることの得がたい現実である。実際、「毎分毎分、私たちは時間の観念と感覚によって押しひしがれている」¹⁵⁾ (*Hygiène*) のである。

II

人間というものは彼が生きる経験の仲介によってある知覚を、従って現実の多かれ少なかれある認識を獲得していく。世界の統合的全体性を期待する人間は、それにもかかわらず現実には欠けた部分があり、それが人間における時間の無限性の不可避的な不可能性によるものであることを知る。それを SARTRE であれば「世界—内—存在」être-dans-le monde と呼ぶであろう。実際、実存的状況というものは現実の経験が情意的限定を含むのであるから、ひとつの気持ち、気分であり、それが BAUDELAIRE にあっては spleen（憂鬱）という形で表れるのである。人間にその有限性を自覚させる時間の持つ残酷な性格について BAUDELAIRE はその表題も *L'Horloge* という詩の中にこう書き記している。

« Tantôt sonnera l'heure où le divin Hasard,

Où l'auguste Vertu, ton épouse encor vierge,
Où le Repentir même (oh! la dernière auberge!)
24 Où tout te dira : Meurs, vieux lâche! il est trop tard! »¹⁶⁾

「やがて鳴るであろうその時刻に、神聖なる〈偶然〉も、いまだ処女なるお前の妻なる気高い〈美德〉も、〈後悔〉までも（ああ！これが最後の宿であったのに！）、みんながお前に言うだろう——死ね、腑抜けの老いぼれ！もう遅すぎる！」(v.21-24)。死の時は一刻も遅れることなくやってくる。そこに慰めは存在しないだろう。「神聖なる〈偶然〉」も、決して利用されることの無かった〈美德〉も、キリスト教の最後の希望である〈後悔〉(＝悔悛)も、哀れな「浮かれ騒ぐ死すべき存在」を死へと断罪する時間には抵抗することはできないであろう。すべてが彼がずっと「卑怯だ」と、つまり時間の苛烈な現実を知らない、弱く甘えた者だと、そして彼にはその時間を支える力は残ってないと告げるだろう。

BAUDELAIRE が何故現在の時を苦として生きなければならぬかといえば、それは彼が古代の身体的な調和の支配する黄金時代を理想の時としていたからである。「Les Fleurs du mal」(第二版)の5番目に置かれた無題の詩の前半で、詩人は古代の民族の持っていた本源的な健康をノスタルジーをこめてこう描いていた。「あれら裸の時代を私は愛する、その石像を〈太陽神〉^{フオイボス}は好んで金色に染めたものだ。男も女もその頃は身のこなしも敏捷に、^{びんしょう}偽りもなく、不安もなしに^{たの}愉しんでいたし、恋心あふれる大空は彼らの背骨を愛撫してくれ、気高い身体器官を鍛えてくれるのだった。〈大地の女神〉もその頃は、豊饒に作物を恵み、わが子らをあまりに重い荷と思うどころではなく、平等無差別の情愛に心ふくれた牝狼よろしく、褐色の乳房で、全宇宙を潤していた。姿よく、たくましく力強い男性は、当然の権利をもって、彼を王と呼ぶ美女たちを誇りにしていた。いささかの辱めも受けず、ひび割れ一つの^{けが}穢れもない^{このみ}果実、女た

ちの滑らかでしまった肉は、嘔みたい気持ちを^{そそ}咬るのだった」。それに対して詩人の生きる^{いま}現在^ははかくのごとく病んでいる。

Le Poète aujourd'hui, quand il veut concevoir
 Ces natives grandeurs, aux lieux où se font voir
 La nudité de l'homme et celle de la femme,
 Sent un froid ténébreux envelopper son âme
 Devant ce noir tableau plein d'épouvantement.
 20 Ô monstruosité pleurant leur vêtement!
 Ô ridicules troncs! torses dignes des masques!
 Ô pauvres corps tordus, maigres, ventrus ou flasques,
 Que le dieu de l'Utile, implacable et serein,
 Enfants, emmaillota dans ses langes d'airain!
 25 Et vous, femmes, hélas! pâles comme des cierges,
 Que rongé et que nourrit la débauche, et vous, vierges,
 Du vice maternel traînant l'hérédité
 Et toutes les hideurs de la fécondité¹⁷⁾!

「今日、〈詩人〉が男性の裸体や女性の裸体が眺められる場所に行って、そうした自然のままの偉大な姿を偲ぼうと思っても、真黒な^{おかん}悪寒がわが魂を包むのを感じずばかりだ、身の毛もよだつ怖ろしさにみちたこの暗黒の^{タブロー}図絵を前にしては。おお、衣服を恋しがって泣く畸形のものどもよ！おお滑稽千万な胴体よ！お面に似合いの^{トルソ}胸部よ！ねじれた、やせた、腹の出た、またはぶよぶよの哀れな体よ、情け容赦なく落ち着き払った〈実用〉の神様が、青銅の産着にくるんで育てた赤ん坊のなれのはて！そしてお前たち、女たちよ、悲しいかな！^{ろうそく}蠟燭のように蒼ざめて、淫蕩に身を養い、また^{むしば}蝕まれ、そしてお前たち、処女たち

よ、母親の悪徳の遺伝を身に受けて、子だくさんの醜さのすべてを曳きずりゆく者たちよ！」。(v.15-28)。それに対して詩人は現代の「われら、腐敗した国民は、古代の民族の知らなかった美しさをもっている」とするが、それは「心げかんの下疳に蝕まれた顔かたちだとか、憔悴の美とでも言うべきものだとか」である。「下疳」とは「梅毒性の潰瘍だが、比喩的にそれが心臓ないし心情を冒した場合を想定して言う」¹⁸⁾ (阿部良雄)。

この不健康な青春時代は、BAUDELAIRE 自身が苦く思い出す自身のそれである。詩篇 *L'Ennemi* においてそれは詩人の創造力の衰弱の不安として描き出される。

Ma jeunesse ne fut qu'un ténébreux orage,
Traversé ça et là par de brillants soleils;
Le tonnerre et la pluie ont fait un tel ravage,
4 Qu'il reste en mon jardin bien peu de fruits vermeils.

Voilà que j'ai touché l'automne des idées,
Et qu'il faut employer la pelle et les râteaux
Pour rassembler à neuf les terres inondées,
8 Où l'eau creuse des gros grands comme des tombeaux¹⁹⁾.

「私の青春は一つの暗黒な雷雨でしかなかった、ここかしこきらめく日の光が射したものの。雷と雨がひどい荒廃をもたらしたので、私の庭には僅かばかりの朱の木の実しか残っていない」(v.1-4)。この詩を書いた時 BAUDELAIRE はまだ三十歳を過ぎたばかりのことだとされているが、v.1の単純過去の使用は詩人が自分の青春時代が完全に終了してしまったと認識していることを示している。時はすばやく流れる。そして v.3の複合過去は過去の行為の結果が現在

まで続いていること、すなわち雷雨のもたらした荒廃は今も残っており、詩作の成果 (= 「朱の木の実」) も極僅かしか残せていないという詩人の嘆きを表している。「こうして今や思想の秋にさしかかった私、それなのにシャベルや熊手を手にとって、洪水が墓のように大きな穴を穿っていった水浸しの土地を再び集め直さなければならない」(v.5-8)。秋は春・夏の生長の後の実りの季節であり、人生の成果の収穫の時期であるはずであるのに、BAUDELAIRE にあっては秋は自己の心身の弱さや創造力の枯渇を実感する季節である。そしてそれは、遂には、冬(すなわち死)の到来(「洪水が墓のように大きな穴を穿ち」)を予感させる凋落の季節である。

Et qui sait si les fleurs nouvelles que je rêve
 Trouveront dans ce sol lavé comme une grève
 11 Le mystique aliment qui ferait leur vigueur?

——Ô douleur! Ô douleur! Le Temps mange la vie,
 Et l'obscur Ennemi qui nous ronge le cœur
 14 Du sang que nous perdons croît et se fortifie²⁰⁾!

「しかもなお誰が知ろう、私の夢見る新しい花々が、砂浜のように洗われたこの土壤の中に、それらの活力ともなる神秘的な糧を見出すかどうかを」(v.9-11)。詩人の「夢見る新しい花々」とは無論 BAUDELAIRE がその創作を希求する詩作品の隠喩であり、「それらの活力ともなる神秘的な糧」とは、通常のそれではなく、精神的な、超自然的な次元のものが必要だとされるが、果たして洪水の水によって「砂浜」のように洗われた詩人の創造の場にそれが可能であろうか。1855年に初めて「Les Fleurs du Mal」という題で雑誌「Revue de deux mondes」に発表された18編中にこの詩が含まれていたことは、収穫の秋の

実りとしての詩集の編纂にはまだ新たな詩の創作が必要だという BAUDELAIRE の焦慮感を表している。「——おお苦痛よ！おお苦痛よ！〈時間〉が生命を喰らい、そしてわれらの心臓を齧る隠微な〈敵〉は、われらの失う血を吸っては、大きく、強くなるばかり！」(v.12-14)。この「敵」が何かについては様々な説が出されてきたが、「死（神）」説にしろ、「悪魔」説にしろ、「倦怠」説にしろ、「悔恨」説にしろ、あるいは「病毒」説にしろ、いずれも「時間」の殺戮の結果として生じるまさに生命に対する「敵」であるということであるだろう。「実際、spleen は BAUDELAIRE に、その過去の非常に否定的な幻影を保つようしいる、なぜなら詩人は過去について、苦しみの慎ましいが、しかし執拗な痕跡だけしかほとんど留めないからである」²¹⁾ (Emmanuel ADATTE)。

このように時間の spleen の意識の次元から言えば、それは BAUDELAIRE にあっては「悔恨」という形で姿を表す。人は誰でも過去に依存し、未来のなかに希望を抱いて現在を生きている。しかし BAUDELAIRE の spleen は既に生きられた過去と可能な未来を無価値化し、詩人を極端な無力さの状態に落としこむ。

——Je suis un cimetière abhorré de la lune,
Où comme des remords se traînent de long vers
Qui s'acharnent toujours sur mes morts les plus chers.
Je suis un vieux boudoir plein de roses fanées,
Où gît tout un fouillis de modes surannées,
Où les pastels plaintifs et les pâles Boucher,
14 Seuls, respirent l'odeur d'un flacon débouché²²⁾.

(LXXVI *Spleen*)

「——私は月にも疎まれる墓地、そこには悔恨のように長い蛆虫がのたくり、わがこよなく愛しい死者たちに絶えず襲いかかる。私は萎れた薔薇でいっぱい

の婦人の居間、そこには流行おくれの衣装が雑然と散らばり、かこち顔のパステルや色淡いブージュの絵が、栓のぬけた香水壺の匂いを吸っているばかり」(v.8-14)。この詩の抜粋は明らかな死の色合いを含意している。そしてここでは「悔恨」が過去の負荷をさらにより圧迫するものになっているのが分かる。

人は、「取り返しのつかぬ」過ちや罪を犯したという意識を持つとき「悔恨」を、後悔の念を抱く。それは、しばしば恥の感情を伴うとても苦しい感情である。「悔恨」はわれわれ自身のもっとも奥深いところに隠された悪であり、ほとんど目に見えない、ほとんど明らかでない仕方であれわれを苦しめる。BAUDELAIRE は詩篇 *L'Irréparable* の中で、悔恨をわれわれを内部から蝕む虫むしばに比較している。

Pouvons-nous étouffer le vieux, le long Remords.

Qui vit, s'agite et se tortille,

Et se nourrit de nous comme le ver des mords,

Comme du chêne de la chenille?

5 Pouvons-nous étouffer l'implacable Remords²⁰⁾ ?

「押し殺すことができようか。古くて、長い〈悔恨〉を、生きて、うごめき、身をくねらせ、私たちを餌食にする、蛆虫しじよが死人をくろうように、櫛の樹を食う毛虫のような、情容赦もない〈悔恨〉を押し殺すことができようか？」(v.1-5)。CL.PICHOIX は「取り返しのつかぬもの」とは「悪」によって荒廃させられていたロマン派の主人公たちと同様に、BAUDELAIRE に憑きまどっていた感情である。それは悔恨のように厳密な過ちではなく、時間の不可逆性の感情と連合した一般的な、潜在的な罪悪性の感情と結びついている²⁴⁾と註釈している。ここでは心に食い込んで離れぬ〈悔恨〉が、心と体を蝕む「長い」虫のようなものに喩えられている。この「長い」という形容詞は、形態上「長い」という意と、時間的に「久しい以前から」という意の両方を持つのだろう。それ

は「どんな媚薬、どんな葡萄酒、どんな煎じ薬」のなかにも溺れさせることができない「ぶちこわし貪り食うことは浮かれ女クルチザースのよう」な「辛抱強さは蟻そっくりの」「敵」である。そして BAUDELAIRE にあっては、「悔恨」は、その只中であれば詩人の魂を手に入れ安んずることができたかもしれない現実を超越する晴朗な死の希望を無化してしまうということが起こる。

Le tombeau, confident de mon rêve infini
(Car le tombeau toujours comprendre le poète),
11 Durant ces grands nuits d'où le sommeil est banni,

Te dira : « Que vous sert, courtisane imparfaite,
De n'avoir pas connu ce que pleurent les morts? »
14 —Et le ver rongera ta peau comme un remords²⁵⁾.

(*Remords posthume*)

「私の無限の夢の打ち明け相手の墓は、(というのも墓は、常に詩人を理解するであろうからだ)、眠りの追放されたあれら大いなる夜は夜もすがら、きみに言うだろう「不完全な遊び女よ、何の取柄があるのでしょう、死者たちの懐かしむところのものをあなたが知らなかったとて？」と。——そして蛆虫は悔恨のようにきみの肌を蝕むだろう」(v.8-14)。

それはパリに生まれ、パリに生きる詩人 BAUDELAIRE にあっては、第二帝政期のオスマン改革によって失われてゆく古きパリへの極端に苦悩に満ちた郷愁によっても示される。BAUDELAIRE は詩篇 *Le Cygne* のなかでこう嘆いている。「古いパリはもう無くなった(都市の形態のすみやかに変わることは、ああ！人の心も及ばぬほど)」。

Paris change! Mais rien dans ma mélancolie
 N'a bougé! Palais neufs, échafaudages, blocs,
 Vieux faubourgs, tout pour moi devient allégorie,
 32 Et mes chers souvenirs sont plus lourds que des rocs²⁶⁾.

「パリは変わる！だが私の^{メランコリー}愁いのなかでは、何ものも動きはしなかった！新しい宮殿、組まれた足場、石材、古い場末の町々、すべてが私にとって^{アレゴリー}寓意となり、私の懐かしい思い出の数々は岩よりも重い」(v.28-32)。「アレゴリーとは、一つの思念を比喩的に表現するのに、孤立した象徴や隠喩ではなくて、寓話的物語、一連の擬人法、または一連の意味的に関係ある映像を展開する修辞。目の前に繰りひろげられるパリの風物のすべてが、詩人にとって「過去」もしくは「記憶」の隠喩となる」²⁷⁾ (阿部良雄)。改造されつつある新しいパリの情景、懐かしい古いパリの情景、パリの慣れ親しんだあの街この街のたたずまいが、パリの歴史の重みそして BAUDELAIRE の生きた時間の重みとなって、詩人の気分を憂鬱にするのである。このように spleen は BAUDELAIRE に、過去の非常に否定的な幻影を保つよう強いる。なぜなら詩人は過去について、苦しみの慎ましい、しかし執拗な痕跡だけしかほとんど留めないからである。

III

「悔恨」に続いて、BAUDELAIRE の spleen の時間的表象は「眠り」の形象をとってあらわれる。詩人は *Le Léthé* という詩の中で直裁に自己の眠りへの願望をこう述べる。

Je veux dormir! dormir plutôt que vivre!
 Dans un sommeil aussi doux que la mort,

J'étalerai mes baisers sans remorts

12 Sur ton beau corps poli comme le cuivre²⁸⁾.

「私は眠りたい！生きるよりはむしろ眠りたい！死と同じほど甘美な眠りの中で、悔いもなく私は接吻を繰りひろげよう、銅のように艶のよい、きみの美しい身体の上に」（v.9-12）。「レーテ」はギリシャ語で忘却を意味する、黄泉の国を流れる河の一つである。亡者はその水を飲んで地上の過去を忘れるという。ここに表明されている「死と同じほど甘美な眠り」への願望は BAUDELAIRE の苦難に満ちた憂鬱な人生を知れば知るほど一層共感を誘う言葉であろう。BAUDELAIRE は他のところで同様の眠りへの願望を表明している。

Je jarouse le sort des plus vils animaux

Qui peuvent se plonger dans un sommeil stupide,

14 Tant l'écheveau de temps lentement se dévide²⁹⁾ !

(*De profundis clamavi*)

「私はうらやむ、昏々たる眠りに沈むことのできるこの上もなく卑しい動物たちの運命を。さほどに時間の芋環^{おだまき}はのろろと繰られてゆく」（v.12-14）。BAUDELAIRE も晩年悩まされた不眠症は人間だけのかかる神経症であろうか。

同じ「眠り」の動きの中で、spleen は同時に未来の価値を下げ、「人生の闘争に疲れた」（散文詩 *Le Port*）詩人に一切の希望の喪失を強いる。

5 Résigne-toi, mon cœur; dors ton sommeil de brute.

Esprit vaincu, fourbu! Pour toi, vieux maraudeur,

L'amour n'a plus de goût, non plus que la dispute;

Adieu donc, chants du cuivre et soupirs de la flûte!

9 Plaisirs, ne tentez plus un cœur sombre et boudeur³⁰⁾!

(*Le Goût du néant*)

「あきらめろ、わが心。獣の眠りを眠るがよい。闘い敗れ、足萎えた精神よ！老いた畑泥棒のお前には、恋愛はもう味がないし、議論とても同じことだ。いざさらば、ラッパの響きよ、フルートの溜息よ！快樂よ、ふくれっ面の陰気な心を、もう誘惑するな！」(v.5-9)。こうして「眠り」が慰めと安息の力をもはや持ちえなくなった詩人の生は、虚無の実存的選択をする。

Et mon cœur s'effraya d'envier maint pauvre homme

Courant avec ferveur à l'âme béant,

Et qui, soûl de son sang, préférerait en somme

24 La douleur à la mort et l'enfer au néant³¹⁾!

(*Le Jeu*)

「そしてぱっくり口を開けた深淵へと熱心に走り続け、わが身の血に酔っては、結局、死よりも苦痛を、虚無より地獄を選びかねぬ、あまたの哀れな男を羨むとは何事かと、私の心は怖れおののいた」(v.21-23)。J.-D.Hubert「賭博場で人々が失う危険を冒すものは、金である以上に魂の救済である」³²⁾と指摘する。その時 BAUDELAIRE が未来の中に理性的に置くことのできる唯一の希望は、諸々の悪から彼を解放してくれるかもしれない近づく死の中に存する。理論的には生からの解放者である死は、それ故 BAUDELAIRE によって、熱意と嫌悪の相反する感情を伴って待たれる。

Quand veux-tu m'enterrer, Débauche fécondes aux bras immondes?

Ô Mort, quand viendras-tu, sa rival en attraits,
14 Sur mes myrtres infects enter tes noirs cyprès³³⁾ ?

(*Les Deux bonnes sœurs*)

「いつ私を埋葬してくれるつもりか、穢らわしい腕をした〈放蕩〉よ、おお〈死〉よ、魅力ではひけをとらぬ姉妹よ、いつ来るのか、悪臭放つ彼女の桃金嬢ミルダに、お前の黒い糸杉を接木しに」(v.12-14)。「桃金嬢」は恋愛を象徴する小灌木であり、「糸杉」は死を象徴する樹木である。

BAUDELAIRE にとっては、死は複雑で多様な形を示す。虚無は裏切り者であり、死さえも嘘をつくかもしれない。しかし時間の形象としての「眠り」は最後には、BAUDELAIRE に限らず誰にとっても「永遠の眠り」への憧憬となって終わるしかない。

Et le temps m'engloutit minute par minute,
Comme le neige immense un corps près de roideur;
Je contemple d'un haut le globe en sa rondeur
Et je n'y cherche plus l'abri d'une cahute.

15 Avalanche, veux-tu m'emporter dans ta chute³⁴⁾ ?

「そして〈時間〉は刻一刻と私を呑みこむ、硬直に襲われた人体を大雪が呑みこむように。私は高みから、丸い形をした地球を眺めやるだけ、逃げ込むための避難所をそこに探してもしない。雪崩なだれよ、落ちるついでに私をさらって行ってくれないか?」。雪崩に吞まれて死ぬこと、これは恐らく夢の死に方の一つであるに違いない。

註

使用テキスト：BAUDELAIRE, *Œuvres complètes*, p.Claude PICHOS, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1975, 1976, 2vols. 以下 *O.C.*, t. I, t. II と略記。

- 1) *O.C.*, t. I, p.73.
- 2) 多田道太郎編『悪の花注釈』, 平凡社, 1988, p.780.
- 3) René GALAND, *Baudelaire, poétiques et poésie*, Nizet, 1969. p.333
- 4) *O.C.*, t. I, p.73.
- 5) 阿部良雄訳註『ボードレール全集 I』, 筑摩書房, 1983, p.546.
- 6) *O.C.*, t. I, p.24.
- 7) *Ibid.*, p.349.
- 8) *Ibid.*
- 9) *Ibid.*, p.337.
- 10) *Ibid.*, p.1341-1342.
- 11) 阿部良雄訳註『ボードレール全集IV』, 筑摩書房, 1987. p.454.
- 12) *O.C.*, t. I, p.281.
- 13) *Ibid.*, p.480.
- 14) *Ibid.*, p.281-282.
- 15) *Ibid.*, p.669.
- 16) *Ibid.*, p.81.
- 17) *Ibid.*, p.12.
- 18) 阿部良雄訳註『ボードレール全集 I』, 筑摩書房, 1983, p.475.
- 19) *O.C.*, t. I, p.16.
- 20) *Ibid.*

- 21) Emmanuel ADATTE, *Les Fleurs du Mal et Le Spleen de Paris, essai sur le dépassement du réel*, José Corti, 1986. p.39.
- 22) *O.C.*, t. I , p.73.
- 23) *Ibid.*, p.54.
- 24) *O.C.*,t. I , p.931.
- 25) *Ibid.*, p.35.
- 26) *Ibid.*, p.86.
- 27) 阿部良雄訳註『ボードレール全集 I , 筑摩書房, 1983, p.564.
- 28) *Ibid.*, p.156.
- 29) *Ibid.*, p.33.
- 30) *Ibid.*, p76.
- 31) *Ibid.*, p.96.
- 32) J.-D HUBERT, *L'Esthétique des "Fleurs du Mal"*, Callier, 1953. p.256.
- 33) *O.C.*,t. I , p.115.
- 34) *Ibid*, p.76.

参考文献

- BAUDELAIRE, *Œuvres complètes*, p.Claude Pichois, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1975, 1976, 2vols.
- BAUDELAIRE, *Les Fleurs du Mal*, Jacques Crépet et Georges Blin, José Corti, 1942.
- BAUDELAIRE, *Les Fleurs du Mal*, p.Antoine Adam, Garniers Frères, « Classiques Garnier », 1961.
- BAUDELAIRE, *Petits Poèmes en prose*, p.Robert Kopp, José Corti, 1969.
- BAUDELAIRE, *Petits Poèmes en prose*, p.Henri Lemaître, Garniers Frères,

« Classiques Garnier », 1962.

Emmanuel ADATTE, *Les Fleurs du Mal et Le Spleen de Paris, essai sur le dépassement du réel*, José Corti, 1986.

Robert Benoix CHÉRIX, *Commentaires des "Fleurs du Mal"*, Droz, 1962.

Marc EIGELDINGER, *Le Soleil de la poésie*, la Baconnière, 1991.

Pierre EMMANUEL, *Baudelaire, la femme et poésie*, Seuil, 1982.

René GALAND, *Baudelaire, poétiques et poésie*, Nizet, 1969.

J.-D HUBERT, *L'Esthétique des "Fleurs du Mal"*, P.Callier, 1953.

Jean PRÉVOST, *Baudelaire, essai sur l'inspiration et la création poétique*, Mercure de France, 1964.

Jean Pierre RICHARD, *Poésie et profondeur*, Seuil, 1955.

Mario RICHTER, *BAUDELAIRE, Les Fleurs du Mal, Lecture intégrale*, Slatkine, 2vols, 2001.

Jean Paul SARTRE, *Baudelaire*, Gallimard, 1947.

阿部良雄訳註『ボードレール全集 I - VI』, 筑摩書房, 1983-1993.

多田道太郎編『悪の花注釈』, 平凡社, 1988